

A-02-2

頭部外傷後遷延性意識障害例におけるピラセタムの投与経験

自動車事故対策機構岡山療護センター脳神経外科¹ 精神科² 薬剤科³

○本田千穂¹, 山村博子³, 吉田英統², 丸尾智子¹, 萬代眞哉¹, 衣笠和孜¹, 西本詮¹

【はじめに】ピラセタムは1967年ベルギーにて開発された cyclic GABA の誘導体で、ヨーロッパでは1992年にミオクロノス治療薬として承認を受けているが、ベルギーでは頭部外傷の昏睡からの意識回復促進および記憶障害、注意力・集中力の低下、情緒不安定等の改善効果の適応も得ている。本邦においては、皮質性ミオクロノスに対する希少疾病用医薬品の指定を受け、1999年より皮質性ミオクロノスに対する抗てんかん剤などとの併用療法に限って使用が認められている。当院は交通事故での脳損傷による遷延性意識障害患者を対象とした専門病院であるが、今回、ミオクロノスあるいはそれに類する不随意運動のみられる患者にピラセタム投与を行ったので、その経験を報告する。【対象】交通事故による頭部外傷後遺症で当院入院中の患者5名で、男性1名、女性4名、年齢は17歳から30歳で、平均21.6歳。受傷から投与開始までの期間は、6ヶ月から46ヶ月。用量、用法は規定に従って、ピラセタムとして1回4g、1日3回から漸増し、1回7g、1日3回を維持量とした。

【結果と考察】受傷後46ヶ月経過していた1例をのぞき、ミオクロノス様の不随意運動の抑制効果が認められ、血液検査データを含め問題となる副作用はみられなかった。意識障害が比較的軽度で、不随意運動や記憶力障害がADL障害の主因となっていた患者ではADLの大幅な改善が得られた。完全植物症に相当する重症例でも、関節他動運動時などの不随意運動や筋緊張が軽減して運動機能訓練を行いやすくなり、関節可動域の拡大などの効果がみられた。期待した意識障害に関する効果は、遷延性意識障害度スコアの改善が得られるほど明らではなかったが、呼びかけに対する表情変化などに若干の改善がみられた。また、I-123-IMP-SPECTによる脳血流測定で改善傾向を認めた症例があり、今後検討を続けたい。